

妖怪がやってきた!



知の森へのいざない

2014 July

vol.

**HUMAN 06**

平凡社

[特集]

# 日本の魑魅魍魎

[対談]

日本人は妖怪がお好き  
小松和彦 × 夢枕獏

国際日本文化研究センター 所長

作家

「妖怪らしさ」  
京極夏彦

小説家



人間文化研究機構・監修







9784582212365

ISBN978-4-582-21236-5  
C0039 ¥1500E

平凡社

定価: 本体1,500円 [税別]



1920039015006

執筆者一覧

山田奨治 (国際日本文化研究センター)

香川雅信 (兵庫県立歴史博物館)

横山泰子 (法政大学)

アダム・カバット (武蔵大学)

堤邦彦 (京都精華大学)

安村敏信 (萬美術屋)

菊地章太 (東洋大学)

武田雅哉 (北海道大学)

山中由里子 (国立民族学博物館)

ブラット・アブラハム・ジョージ (ネルー大学)

マイケル・デイルン・フォスター (インディアナ大学)

高岡弘幸 (福岡大学)

大泉実成 (オンライン作家)

東雅夫 (文芸評論家)

松村薫子 (国際日本文化研究センター)

武村政春 (東京理科大学)

常光徹 (国立歴史民俗博物館名誉教授)

大崎仁 (人間文化研究機構)

阿部健一 (総合地学研究所)

石坂晋哉 (人間文化研究機構地域研究推進センター)



## インド人にとって〈幽霊〉とは何か

ブラット・アブラハム・ジョージ (ネルー大学)

### 「ブート」と「プレータ」

インド人にとって、日本で言う「化け物」「悪魔」「妖怪」「幽霊」のすべてを表す言葉が「ブート (Bhoot)」または「プレータ (Preta)」である。

インド人は昔から、他界・異界、霊界・幽冥界などの存在を信じてきた。霊魂は人の死後すぐに他界・異界へ行かないで、あの世とこの世の境目のところ、霊界・幽冥界をしばらく漂い続ける。そして、この世に生きている親戚による葬送儀礼をはじめ、さまざまな儀礼・祈禱によって他界・異界へ導かれていく。しかし、中にはこの世への深い執着のため、または自分を苦しめた人への怨念を晴らすために、怨霊としてこの世にさまよい続ける霊魂もいる。このような怨霊が〈幽霊Ⅱ「ブート」「プレータ」〉として現れるのである。

〈幽霊(プレータ)〉は非業の死を遂げた死体の姿、もし

くは棺桶に入っていたときの死に装束のまま出現する。

〈幽霊(ブート)〉という言葉には「過去のものの再現」という意味が含まれているが、その名のとおり、生前の属性をそなえて出現する。インド各地の民間伝承に頻繁に出てくる〈幽霊〉は、なんといってもブートである。

インド人にブートのイメージはどんなものかと尋ねたら、おそらく死者を離れた得体の知れない霊魂で、ときどき生者の前に出没するものとか、我々人間に見えない世界に漂流し、臍で輪郭がはつきりせず、瞬く間に現れたり消えたりする能力を有するもの、という答えが返ってくるだろう。

インド人の考えでは、ブートには影法師がない。同時に複数の場所に出現することができ、動物などに化ける力、瞬時に姿を変える能力を持っているものもある。瞬きをしない。中には鼻声で話をするものもある。その理由は分からないが、おそらく生きている人間との区別をつけるために祖先たちが考え出した業ではないかと思う。また、足が



インド人にとって「幽霊」とは何か

ブラット・アブラハム・ジョージ

「プート」と「プレータ」

インド人にとって、日本で言う「化け物」「悪魔」「妖怪」「幽霊」のすべてを表す言葉が「プート (Poot)」または「プレータ (Preta)」である。

インド人は昔から、他界・異界、霊界・幽冥界などの存在を信じてきた。霊魂は人の死後すぐに他界・異界へ行かないで、あの世とこの世の境目のところ、霊界・幽冥界にしばらく漂い続ける。そして、この世に生きている親戚にしばらく漂い続ける。さまざま儀礼・祈禱によって他界・異界へ導かれていく。しかし、中にはこの世への深い執着のため、または自分を苦しめた人への怨念を晴らすために、怨霊としてこの世にさまよい続ける霊魂もいる。このような怨霊が「幽霊」「プート」「プレータ」として現れるのである。

「幽霊 (プレータ)」

くは棺桶に入っていたときの死に装束の「幽霊 (プート)」という言葉には「過」という意味が含まれているが、その名の性をそなえて出現する。インド各地の民間に「幽霊」は、なんといつてもプートにプートのイメージはどんなおそろく死者を離れた得体の知れない霊者の前に出現するものとか、我々人間に流し、臍で輪郭がはつきりせず、瞬く間りする能力を有するもの、という答えがインド人の考えでは、プートには影法複数の場所に出現することができ、動瞬時に姿を変える能力を持つているものない。中には鼻声で話をするものもいるが、おそろく生きている人間とに祖先たちが考え出した業ではないか

は非業の死を遂げた死体の姿、もし

生きている人間とは逆方向に付いていたり、足のないものもあると言われる。

一見歩いているように見えるが、実は地面の上を流れている・浮いているものもある。インドでは土は聖なるものとされているので、ブートはこの聖なる土を怖がっている。それで、ブートの出る恐れのある場所を通るとき、身体に土を塗りつける習慣がある地方もある。また、金属製の道具（特に鉄）、聖典などを持っている人にもブートが近づかないと信じられている。

このような、一般のインド人が現在持っているブートのイメージは、代々伝わってきている口承文学およびそれらの民間伝承・伝説を基に作られるホラー小説、演劇、映画などから得られたものが多いと思われる。

そういえばホラー映画、ホラー小説などには、家や屋敷に住む怨霊が頻繁に登場する。ブートはまた怨霊にならないうちは木の上に住んでいるようだが、怨霊になると怨念の対象となる人が住む同じ家・屋敷に住み、怨念を晴らす機会を待つと信じられている。

### インド文化の多様性

周知のとおり、インドは多様性に満ちた国で、さまざまな民族、宗教、言語、地理学的な特徴を持っていて、各地

また、民族性も関係しているような気がする。インドの人口の約八〇パーセントはヒンドゥー教徒であるが、同じヒンドゥーでも北部と南部ではそれぞれ民族が違うので、文化も言葉も、民間伝承、民族宗教なども違っている。アニミズム・シャーマニズムの要素は南インドと東北インドに多く見られ、これらの地方に〈幽霊〉の種類も、〈幽霊〉の存在を信じている人の数も多い。



図1 逆さまのヴェータル

方の文化、社会の慣習、自然現象や死後世界に対する考え方、死生観、宇宙観などは多種多様である。それでも、すべてに共通して、一種の「インド性」が存在している。その「インド性」というるつぼの中で多様性が溶解され、混合し統一された結果、現代インドの複合的な文化体系が生まれてきた。換言すれば、複合体となったインド文化の中には、異質性も同質性も同時に並行して存在し、ある地方で受け入れられているものであっても、他の地方にとって異質である。しかし、いずれもインド文化であるのは間違いない。

インド人の感覚内にある〈幽霊〉のイメージ、姿かたちなどについて考えるときも、こういうインド文化の複合性、多様性を抜きにして説くことは不可能である。つまり、南部のケーララ (Kerala) 州出身である筆者の持っている〈幽霊〉のイメージは、インド北部出身の人の持つイメージと全く違ってあたりまえということである。

後に説明する「ヴェータル (Vettala)」「図1」のようにインド全国に伝わる〈幽霊〉もいるが、各地方にそれぞれ特徴のある〈幽霊〉がたくさんいる。中でも、南インド・ケーララ州、北東部のベンガル (Bengal) 州など海と山に挟まれている地方や盆地には、他の地方より幽霊譚の種類が多い。

### 代表的な「ブート」

代表的なブートには、先ほど触れた「ヴェータル」、北インドの人がまず頭に思い浮かべる「チュライル (Churai)」「図2」、南インド・ケーララ地方に伝わる「エクシ (Yakshi)」「クツタイ・チャータン (Kuti Chattan)」「マルタ (Marutha)」「マータン (Matan)」「ピシャチュ (Pishachu)」、東北インド・ベ



図2 チュライル



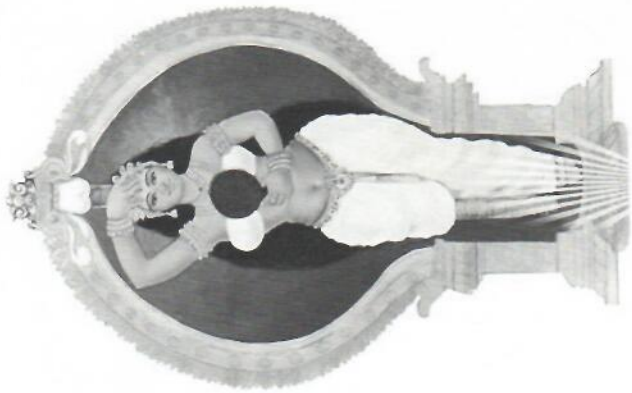


図3 スンダラ・エクシ

ンガル地方に伝承される「プレタニ (Pretani)」「ベンチャペチ (Penchapechi)」「メツチヨ・ブート (Mechho Bhoot)」などがある。以下こうした「ブート」を中心に、インドの〈幽霊〉の特徴を簡単に紹介したいと思う。

インドの口承文学に現れる最も古い幽霊譚の一つである「ヴェータル」は、いつも火葬場にある木の枝に逆さにぶら下がっている、「逆さまの幽霊」である。しかし、「エクシ」や「チュライル」のような、人殺しをしてその血肉を食う恐ろしい〈幽霊〉ではないので、子供でもその話を面白く聴くが、怖がることはあまりない。中央インドのウッ

うなものの中から突然出現する妖艶な別嬪の「エクシ」である。その別嬪が、次の瞬間に牙を剥き、見ただけでも気が遠くなるような恐ろしい姿に化けてしまう。

最初普通の女性の姿で現れ、自分のことをちつとも疑わない男を恋の虜にして、唆して連れてきた男と結婚までした拳句、噛み千切つてその肉を食い、血を飲んでしまう(たまには女性も犠牲者になる)。残るのは骨と、爪と髪の毛だけである。ケララ地方の子供は誰でも幼いときから、自分の両親や祖父母の口から、古くから伝わるこの幽霊譚を耳にしながら成長していくのである。

エクシは非業の死を遂げた女性の〈幽霊〉で、自分の人生を壊したものへの怨念を持って、その対象となっている者を殺し、その血肉を飲食するまでは、なんらかの方法でこの世に残ることを誓って現れる。自分の目的を達するため、遠慮なくどんな惨い手段でも取る。ほとんどは生前の姿かたちで出現するが、時には美しく若い女性の姿で、時には痩せこけた老婆の姿で、たまには猫などの動物の姿で現れることもある。

インド人の考えでは、人間の魂は滅びることができないものだから、人が死ぬとその魂は別のものに生まれ変わる。非業の死を迎えた人の魂は、いつか人間の子供として生まれ変わり、恨みを晴らす機会を待つか、それとも怨霊とし

ジャイン (Jain) の火葬場に住んでいたヴェータルは、ヴェイクラマーディッテイヤ (Vikramaditya) 王に服従していた。王を慈悲と博愛のある統治者にさせ、人間を幸福にするのが目的だったと言われる。ヴェータルが毎日尋ねる謎めいた質問に、王が正しく答える限り、僕としていつまでも仕えるという約束だった。王は二十三回まで正しく答えたが、二十四回目は答えられなかったので、ヴェータルは離れていつてしまったという話である。

インド北部の「チュライル」は、妊娠中または出産時に何らかの理由で死亡してしまった女性の〈幽霊〉で、生前の姿で出現する。足が逆方向についていることや、身体他の部分は逆さになっていることが特徴である。チュライルの好物は若い男である。普通は、道端、交差点、野原など若い男を唆しやすいところ出現する。チュライルに魅惑され、彼女と結婚して通常の家生活を送る男までいると言われるが、結局その男はいつかチュライルに殺されることになると思われている。

### 怨霊を鎮める

ケララ州出身の筆者の頭にまず浮かんでくる〈幽霊〉は、真っ白なサリ(紗; インド人女性の民族衣装)を着て、艶々した黒髪が膝裏まで垂れ下がり、煙のような、霧のよ

で出現して自分を殺害した人間またはその親戚などの身体に憑き、恨みを晴らす機会を待つかする。

このような〈幽霊〉を鎮圧して征服することはなかなか難しい。いろいろな方法があるが、魔法使いや陰陽師の手を借りて、征服し服従させてから、どこかのお寺で神・女神として祀ることによっていったん鎮静し、この世を離れるように仕向ける。エクシの場合も、魔法使い・陰陽師が宗教的な儀式や「マントラ (Mantra)」＝呪文を唱えてエクシを呼び寄せて、身体についている怨霊をはらい出してあの世へ見送ってやるのが一般的で、どこかのお寺で女神として安置することもある。

ケララ地方には、エクシを女神として祀っているお寺が数多くある。中でも、バナヤンナール (Panayannar) 寺の「バルマラ・エクシ (Parimala Ekshi)」、カタヴァラツカーヴ (Kattavarakavu) 寺の「スンダラ・エクシ (Sundara Ekshi)」(図3)、パドマナーバスワミー (Padmanabhaswamy) 寺院に祀つてあると信じられている「カンジロットワ・エクシ (Kanjilottu Ekshi)」などが有名である。